

# 中国60年代と世界

第2期第8号(通巻第15号) 2018.4.26

発行人 〈中国60年代と世界〉研究会(幹事・土屋昌明)

編集人 文革50周年再検討会編集グループ

〒214-8580川崎市多摩区東三田2-1-1-9603 tuwuchangming@yahoo.co.jp

例会報告 50年代末から連続する異議申し立てへの忌避と差別と弾圧(1) / コメント 六・四に対する私の問題意識…朝浩之(1) / 私は一貫してアマチュア作家である 周縁には周縁の心地よさがある…徐星、鳥本まさき訳(3) / 例会予稿 天安門事件30周年に当たり、中国電腦社会主義を語る…矢吹晋(9) / 胡傑監督『林昭の魂を探して』字幕(その7・最終回)…土屋昌明編訳(16) / 今後の研究会予定…(8)

例会報告(2月22日)

## 50年代末から連続する異議申し立てへの忌避と差別と弾圧

2月22日(木)19時から専修大学神田校舎ゼミ45教室において、2018年2月例会をおこない、本会幹事の土屋昌明が「2017年度の研究成果と今後の展望」と題する発表をした。このうち、2017年度の研究活動については本誌第7号の「例会予稿」をご覧いただきたい。

今後の展望については、次のような観点を提示した。1979年および1989年の政治運動は、反右派運動から文革の造反の流れの上においてみることができる。それとともに、反右派運動でのいわゆる右派分子に対する抑圧、文革造反派に対する弾圧とともに、79年および89年の運動参加者にも、これらと同様な、あるいはそれ以上の打撃が鄧小平によっておこなわれた。それをもっと認識すべきである。そのための資料を発掘し、日本語に翻訳したり日本で紹介したりできるよう進めるべきである。例えば、89年の運動で逮捕された人々について、廖亦武がインタビューをしており、それが『子彈鴉片』にまとめられている。これを読むと、いわゆる天安門広場の学生リーダーおよびその支持者たちと、解放軍が広場に向おうとしているのを阻止しようとした学生・一般市民とで、大きな認識の違いが存在していることに気づかされる。廖亦武は、後者にインタビューしており、彼らは学生リーダーらと違って、事件の表層には現われないが、しかし学生リーダーらより酷い仕打ちを当局からされた。こうして見ると、この事件のより具体的な細部、参加者のそれぞれの時間と経験、逮捕者の監獄での生活やその後の成り行きなどは、ほとんどないがしろにされているのであり、こ

うした点をもっと掘り出すべきである。

昨年の中先痴の話でも、もと右派の老人たちが60周年を記念する行事をおこなうのが困難だったとのことである。彼らは80年代までに名誉回復されたはずなのに、なぜ今でも差別をうけるのか? 同様なことが、79年と89年の運動参加者にもおこなわれているのである。こうした態度は、もちろん中国社会の根深い差別意識をあらわしているが、その背後に50年代末から連続する、右派(体制への異議申し立て)への政治的な強い忌避感があるのだろう。

本研究会としては、来年の89年天安門事件30周年を機に、反右派・文革・79年民主化運動などと連続しながら、新たな資料や観点を紹介しつつ研究していきたいと考えている。

なお、例会当日は徐星監督のドキュメンタリー「我的“文革”編年史(私の『文革』編年史)」(2007年、約90分、中国語字幕)を例会前に内覧した。この監督と作品については、本誌今号の鳥本氏の文をご参照いただきたい。(文責・土屋)

## 六・四に対する私の問題意識

朝浩之

私たちは1年目に「文化大革命」を研究テーマとし、2年目は文革から過去に遡って「反右派運動」、そして本年は文革から先に進んでの「六・四天安門事件」となった。これは、土屋氏が本誌前号の巻頭論考で引いた「反右傾、四清、文革、そして89年六四事件は、いずれも反右運動の延長ないし発展にほかならない」

という申淵氏の言説に符合するものだ。私たちは「これ [文革について考えるのを避けること] は現在に直接結びついている歴史を考えないということ」「そう [文革を現代史から切りだして考える] ではなく、なるべく歴史のコンテキストの上で考察すべき」(ともに土屋昌明「文革を再考するいくつかの視点—総説に替えて」『文化大革命を問直す』) という観点を共有する。それぞれ着眼点は異なるとしても、文革を全否定することに与せず、大衆運動、文革に参加していった人々が何を目指したのか、文革の理念を探ることを文革研究の本義と見なす立場と言える。文革を革命以降の今も継続する社会主義建設—中国現代史というスパンで見なければならぬ。あくまで現在の中国を見るという観点から文革を論じなければならぬと私は考える。

以上の問題設定を踏まえて、私の六四に対する問題意識を整理してみた。

一つ目。20世紀史上、未曾有の国家を揺るがす混乱を引き起こしたといえる文革を指標として、反右派運動—文革—六四の連続性を、繰り返された反権力闘争の敗北の過程ととらえ、今日の中国を六四によって決定づけられた社会と見るならば、六四を考察することは現在の中国、中国のゆくすえを解明することにつながるはずだ。反権力闘争は権力の腐敗また暴走に対抗して引き起こされるが、腐敗また暴走に至らしめる権力の過度な集中、独占を排除するチェック&バランスが保証されるべくもない一党独裁=プロレタリア独裁の可否に踏み込むことにもなる。

二つ目。文革までの中国と六四前後の中国をめぐる国際環境の違いをおさえなければならぬ。文革までは、欧米、日本といった資本主義諸国の大多数とは国交がなく、文革に至っては中ソ論争を経てソ連との関係も悪化し、国際社会の中で孤立していた。これに対して六四の時期は国連加盟以降、諸外国との関係改善がなされ、改革開放政策によって経済・貿易交流も盛んとなっていた。即ち、政治的緊張関係の反作用として国家レベルで国際的影響を受ける時代から、改革開放政策による経済的・人的交流の拡大によって社会のすみずみまで国際的影響力を受ける時代に転換したのである。そうした背景があって、六四は端的に言えば、経済改革とともに政治改革も

推し進めようとした胡耀邦らに対して、鄧小平らが NO を突きつけたことによって生起するのである。

結局のところ六四運動は挫折するが、挫折の理由を考える上で、次の点は考察に値するのではないか。鄧小平らは文革と同様に国家解体の危機に対応した。実際、同じ年に東欧社会主義諸国が次々と消滅し、12月にはソ連が解体している。一方、学生、知識人、政権内改革派は横暴化する国家権力に対する抵抗運動を組織し民主化を求めた。この齟齬が抜き差しならぬ対立へと進むことを何故止められなかったのか。

もう1点。政治改革、民主化を支える思想には、二つの系譜があったと思える。反右派運動—文革の流れをくむ社会主義建設の中で生みだされてきた思想、そして改革開放の中で流入してきた欧米の思想である。政権側は「和平演変」(平和的手段によって政権崩壊を企図) 反対を強調したが、こうしたスキを与えないような思想醸成はできなかったのか。

三つ目。六四は政治、社会運動の面から論じられることが多いが、経済面を抜きにしては論じ尽くせない。鄧小平は、経済改革の実現に衝かれて政治改革への要求を強めた学生、知識人、政権内改革派をさらなる経済改革を阻害するものとして排除することを決断した。軍隊を動員して弾圧し虐殺に至らしめたことは強く批判されるべきだ。しかし、経済改革を優先するという鄧小平のこの判断が高度成長をもたらした、豊かになったという事実を、豊かさを享受している私たちが単純に否定できるのか。政治改革を押しとどめた結果、豊かになったことに対する対抗理論が必要になる。

運動に熱気があるときに運動内にいることによる高揚感は気持ちのよいものだが、熱気が冷めていくための、どのような準備をするのか。60年代末の日本の学生運動を見ても、困難なことであるが、六四を考究していくことで回答に近づくことはできるかもしれない。

米国に次ぐ経済大国となり、さらに軍事大国、政治大国への道を突き進んでいるかのように見える中国。しかし、表層観察ではなく、世界と中国、世界の中の中国という視点から深層観察をしなければならぬと思う。そもそも国家とは何か、という問いを念頭に置きながら。 ☆

# 私は一貫してアマチュア作家である 周縁には周縁の心地よさがある

徐星 (訳・鳥本まさき)

## 訳者前書き

2月22日(木)午後5時30分から7時まで、本研究会で、作家でドキュメンタリー監督の徐星のドキュメンタリー映画「我的“文革”編年史(私の『文革』編年史)」(2007年、約90分、中国語字幕)を内覧した。本作は、徐星が14歳だった1970年当時から振り返り、高校生時、クラスメートに初めてのラブレターを渡すが、その女生徒は先生にそれを報告してしまい…などの回想と、文革時期の社会的事件を織り交ぜ、第1人称で撮った(セルフ)ドキュメンタリー。胡傑監督が『私が死んでも』で撮った北京師範大学附属女子中学副校長の卞仲耘さんの夫への取材も含まれる。

紹介者の私、鳥本としては、徐星が「農村の文革」という角度から撮った『罪行摘要』(2014年、現在、日本語字幕制作中)とともに、この「我的“文革”編年史」も字幕をつけた上、改めて上映する機会を作りたいと考えている。

「我的“文革”編年史」のプライベートなドキュメンタリーのスタイルは、監督が小説家(出身)であることと関係があると考えられる。以下に、徐星氏への2012年のインタビュー記事「徐星 私は一貫してアマチュア作家である 周縁には周縁の心地よさがある」を翻訳し、補足の情報として提供したい。

## 『南方都市报』記者インタビューの経緯

徐星、作家、ドキュメンタリー監督。1956年北京生まれ。1977年、入隊。創作を開始。1981年、復員後、北京ダックの「全聚徳」で働く。1985年、処女作小説「無主題変奏」が雑誌『人民文学』に掲載、中国当代文学の伝統が現代に転じるメルクマールとなる作品の一つとみなされる。1989年、講義のため渡独。1992年、独ハイデルベルク大学で学ぶ。1994年に帰国。2005年に長篇小説『剩下的都属于

你[残りは君のもの]]を発表。2000年以降はインディペンデント・ドキュメンタリー映画の撮影制作に従事している。

80年代は文学が盛んだった。中国内地の文壇にはたくさんの光りきらめく名前が湧き出てきた。それらの名前は当代中国語による創作の景観と骨組みを形成した。30年が経過した。こうした当初「作家」の名で現れた人たちは、社会の脈動、経済の流行・変化の間において、この時代の細分化における生存のモデルあるいはマスクとして、ビジネスマン、映画人、音楽人になっていった……それでも作家である人もいる。

2011年、徐星の1人の友人が小説「無主題変奏」の文献展を行おうとし、徐星は当時の読者からの手紙を提供した。当時、これら全国各地からの来信は徐星にキロ単位で押し寄せた。彼らは同小説中のゆらゆら揺れるあの主人公が与えたショックを徐星に吐露したのだった。

1985年に中篇小説「無主題変奏」を『人民文学』に発表した時、徐星は和平門の全聚徳烤鴨店で清掃工をしていた。この小説は後に劉索拉的「你別無選択[あなたに別の選択はない]」と共に、中国の「モダニズム派」小説の代表とみなされ、徐星は「先鋒[前衛]作家」の肩書で人をあっと驚かせた。

1991年、徐星はハインリヒ・ヘル基金会の招きで、ドイツで創作することになった。彼の前に招かれた作家はソルジェニーツィンだった。1996年、徐星は長篇小説『剩下的都属于你[残りは君のもの]]を完成させた。「壁の中で咲いた花が壁の外で香る」との慣用句のように、仏語版の出版が中国語版より先に出たほか、独語版が1年もしない内に再版された。これは中文小説では珍しいことである。

しかし、その後、分岐した小道のように、徐星はドキュメンタリーを撮り始めた。「文学は今、実は私から離れている」。徐星は南方都市报[以下「南都」]の記者に語った。

徐星にインタビューした日、彼は米国から帰国したばかりで、時差に加え、ひどい風邪の影響で、若干疲れて見えた。しかし彼は「より重要な原因は今編集に取り組んでいるドキュメンタリー映画『『罪行摘要』』にある」と語った。徐星は「映画の雛形はすでに出来上がった。しかしまだやらなければならない仕事有大量にある」と言った。2年前、徐星は宋荘〔北京の芸術家村〕のある画家の友人のところで40年余り前の「現行反革命」の罪人の登録簿22枚を見つけた。この1年間、徐星はこの22枚の黄色に変色し傷んだカードを持って、浙江省の農村をほとんどあまねく訪ね歩いた。徐星はこのドキュメンタリーによって、研究のもう一つの視角——「文革」における農民——を提供できればと望んでいる。だが小説の執筆にしろ、ドキュメンタリーの撮影にしろ、徐星によると、いずれもそれ以上のものを彼にもたらしはしない。これまでずっと住宅も車も仕事も収入も保険もない状態にある彼は時に、「親のすねをかじる」必要さえあった。2010年に彼は微博上で「自分に墓碑銘を起草する」というお遊びを行った。徐星が書いたのは「この男はこれで安定することになった」というものだった。自嘲の言葉に事欠かない。

### 80年代——「それほど大きな文学的貢献をしたとは思っていない」

**南都** 80年代に「無主題変奏」が出て、あなたが最も有名だったころ、先鋒作家の光の輪にすっぽりと覆われていたころ、その当時は作家を職業にしようと思っていましたか？

**徐星** いいえ。これまで職業作家だったことはない。デビューしてから今までずっとそうではない。私は作家協会の会員のたぐいでもない。職業作家は数多いだろうが私は違う。実のところ私は一貫してアマチュア作家だ。今でも私は素人のドキュメンタリー映画作家だ。すべてアマチュアだ。それがいいんだ。周縁には周縁の心地よさがあると感じている。

**南都** あなたは今、文学に対して、どのような態度でいますか？

**徐星** 形式的に言うと、実のところ、今私は文学からかなり遠い。文学界のことをよく知らないし、あま

り関心を持っていない。だが思うに私のような人間は、文学が血液の中に流れているのだろう。私は文学を愛しているし、文学少年から始まり、文学青年となり、小説を書いた。今は形式的に見ればずいぶん遠いが、実はそんなに離れていない。だが小説を書くというのも技巧に関することだ。今後、引き続き作家を続けるかどうかよくわからない。文学は確かに離れていた。でも、時には注目することもある。例えば昨日、微博を見ていたらパチンと文学の世界に引き戻された。面白いと思った。ある友人が転送してくれた。上海の雑誌『収獲』の主編だが、他の人と文学について話していて、相手にたくさん名前を列挙していた。あれやこれやと。彼は「徐星以外はみない」と言った。これには頭にきた。彼のこのような言い方は無責任でいい加減だ。これこそ「教えずして殺す」の典型ではないか？ 私の文学をどうコメントしてもいい、たとえば徐星というやつは幼稚だ、食わせものだ、とてもあれだ… そういうのは受け入れられる。だが「これらの作家のうちで徐星以外はみない」とは何だ？ それを見た後、コメントしてけなしてやった。たとえば生活の中でこうしたことが起こると、突然文学の中に戻ってしまう。

**南都** たとえば、この例のような文壇の序列みたいなものは、80年代当時、あなたの周辺に存在していましたか？

**徐星** なかった。この「壇」というやつには全く縁がない。そんなのと関係を持つことはない。だが、もちろんプライベートの友人というのはいる。そういう関係以外に、この組織と何の関係もない。今に至るまで作家協会の会員ではない。どうでもいいんだ。だから彼らも私を認めない。もし本当にそんな「壇」があっても、彼らが私を認めることは一度もないだろう。

**南都** 作家協会はあなたを取り込もうと試みたことはありますか？

**徐星** あった。ありがたいけど断ったよ。もうずいぶん前のことだ。当時、彼らは申請書を持ってきた。中国作家協会の。でも書かなかった。その紙はまだどこかにあるよ。

**南都** その時なぜ書かなかったのですか？

**徐星** 当時は、こんなことはつまらないことだと思

ったんだ。

**南都** でも当時あなたの小説が発表されてから、影響はとても大きかったですか？ 読者からの手紙は多かったですか？

**徐星** 手元にたくさんの手紙があるよ。何束も。とても面白い。社会のさまざまな姿を反映している。精神病を病んだ人、文学青年、教師、農民、軍人、警察も。各業界・業種がすべてそろっている。当時のファンは今のファンと比較可能だ。あの頃はパソコンがなかった、手紙だけだった。彼らは私が北京の全聚徳で働いているのを知っていた。だから手紙はみなそこに送られて来た。当時郵便受け取り室の人もどこか抜けていた。私は一番多くて、一日 1 キロ以上受け取ったよ。受信室の人は手紙を一束にくくって、その後、私が北京ダックの店の門から出るとき、「徐星、これやるよ！」と一束くれた。見ると全国各地から来ていた。もちろん、これは文学の成果などではない。これが物語るのはただ、中国が当時ちょっと奇形だったから起きた、ということに過ぎない。私はずっと自分が文学で大きな成果を成し遂げたと思っていない。ウソじゃない。本当に率直に言っているのであって、気取って謙遜しているわけじゃない。ただラッキーだったのは、あの奇形な年代において独特な声を発して、それがみんなに聞き届けられたということだ。かなり偶然のことだった。徐星が声を発しなくても、おそらく張星だか、李星だかかいただろうよ。文学についてさらに言うなら、デビューしてから今まで、何らの実際的な恩恵を与えられてない。本当だ。富が与えられたわけでもないし、その名声を少しも利用しなかった。どう利用するのも知らなかった。全く恩恵はない。こうした名声というのはすべてがまやかしたということをとっくによくわかっていた。

**南都** いつわかったのです？ 有名になってから何か変化はありましたか？

**徐星** あっただらうね。一番大きな変化は面倒なことがたくさんもたらされたということだ。北京ダックの店の指導者は、もちろんこんなことを受け入れられるはずはなかった。彼にとってはえらく面倒なことだ。彼が必要としていたのは、本分に従いフロアをきれいに清掃してくれる別の労働者だった。と

ころがこいつは、毎日店の門の階段で大きな箒を抱え、大きなゴミ箱を背負いながら、いろんな記者の取材を受けているんだから、彼にとったら大きな邪魔者だったろう。なぜなら、当時は今と違って計画経済だったから。今ならこんなことが起きれば、店主はビジネスチャンスだと思うだろう。こんな圧力の下にあって、店は基本的に言う私をクビにした。それからというもの、楽な日々は二度と訪れなくなった。というのは、当時は今と状況が大きく異なるからね。本の取り次ぎ商もなかった。だからその後、小説を書いて金儲けする、たとえば郭敬明だとか安妮宝贝だとか、そういうのが出てくるのは、もっと後になってからだ。彼らは生まれ合わせが良かった。私は生まれ合わせが悪かった。

**南都** でも郭敬明たちみたいに書かなければ、つまりああやって量産しなければ、お金を儲けることはできないでしょう？

**徐星** 君が言うのは正しい。私はとても怠け者だ、書いたものも少ない。しょっちゅういいアイデアが浮かぶのだが、その衝動が来ても、書かずにほっぽらかしてしまう。

**南都** 仮にあの小説がなければ、あなたの生活はどうなっていたか考えてみたことはありますか？

**徐星** それは面白いことだ。考えたことはない。初めてそんな質問を聞かれた。もしあの小説がなくても、もちろん北京ダック店で一生清掃労働者をしてきた可能性は少ないと思う。たぶん、やはり芸術方面のことをしていただろう。文学青年だったし、文芸を熱愛していたからね。きっと何か別のことをしていただろう。というのもあの時代、舒婷〔1952年福建省生まれの女性詩人。文革後、文化の単一化、均一化に対して、個人の内なる情感をイメージ、暗喩などを多用して表現した「朦朧詩派」に北島らとともに帰される。79年に詩の創作を開始〕の仕事は何だったか知っているか？ 電球工場の生産ラインで電球を包装していた。また、北島〔1949年生まれ、詩人。78年、芒克らと地下文学雑誌『今天』を創刊〕は鋳物工場の労働者だったし、詩人の芒克〔50年生まれ〕は病院の警備員、陳建功〔49年生まれ、作家協会副主席〕は房山炭鉱〔北京の西にある〕の炭鉱夫だ。みんなこんな状況だった。だから北京ダ

ックの店の清掃工が小説を書くのは、少しも珍しいことではない。君くらいの年齢の人たちには想像しがたい時代だ、なかなか面白くもあった。

### ドキュメンタリー——「人を撮るのはより小説に近い」

**南都** 今取り組んでいるドキュメンタリーはどの程度できあがりしましたか？

**徐星** ひな形は出来上がった。今編集中だ。これはかなり複雑な作業だ。だがとてもやりがいがあり、面白い。映画を撮る上で、最も試されるのがこの部分だ。

**南都** なぜこの作業が最も試されるというのですか？

**徐星** 構造、叙述、ストーリー、組み立て、どうやって映画を見る人の視覚に受け入れてもらうかを考えなければならない。だから技術的な要素がとても多い。

**南都** 素材もかなり長い時間撮りためたのでしょうか？

**徐星** 素材は100時間あまり撮影した。昨年ずっと浙江の農民のところをまわり、かなりの時間を費やした。撮影の過程はなかなか大変だった。交通手段がないことも多く、あらゆる手段を取ったよ。

**南都** 罪人登録簿何枚かでその人を探すというのはかなり大変な過程ですよね？

**徐星** 大変だ。一番大変なのは、私には政府の背景が何もないことだ。これだとかなり難しい。もし中央電視台やどこかの部門の紹介状を持っていたなら、お上のルートで非常に簡単に、早く探すことができただろう。そんな方法はないから、自分で考えられるすべての方法を用いて探すしかなかった。現地の友人に電話して探してもらった。多くの地名が変えられていた。かつて紅旗站、革命街の類だったものが、今は元の名前に戻されていたり、変化は大きいよ。いずれにしても聞くんだった。たくさん尋ねたよ。人を探す際の状況も記録した。ある場所に探しに行ったが、その人はその後、どこへ行ったかわからない。そこで、その道にいる人にその人はどこに行ったかを聞く。どんな手段でやったかも撮影して映画の一部にした。そのほうが真実だからね。

**南都** あなたは早くから「文革」に関心を持っている。その上、文革に対する視角がかなり独特です。

こうしたことはどこから来るのですか？

**徐星** たくさんの要素が動かす力となっている。一つに私は好奇心がとても強い。こうした事を目にとると、すぐに好奇心を引かれる。この内側にはたくさんの物語が埋まっていると思う。もちろん簡単な形式の一枚の紙だ。とても薄く、破れた古い紙で、ガリ版のレトロ感が漂い、内容もさして多くはない。しかし一目見たとき、「今やっている仕事が終わったら、すぐにこの人たちを探しに、会いに行こう」と思った。「それもなるべく早く。彼らはみな年をとっているのだから」と。宋荘の映画を撮り終え、編集が終わったとき、本当にすぐに機器を持って出かけた。もう一点は、これらの登録簿の当事者はみな農民だったことだ。これには非常に驚かされた。なぜなら「文革」でいわゆる幹部、知識分子、大芸術家が迫害を受けたことはみんなが知っている。よく耳にしている、詳しくわかっている。老舎、劉少奇、彭徳懐などみな大人物だ。しかし、農民の彼らは最も底層だ。ほとんど誰も「文革」における底層農民に関心を注いでいないように思われた。それですぐに「これはおそらく“空白”なのだ。“空白”であるからには誰かがそれについて語らなければ、誰かがやらなければならない」と意識した。簡単に言ったら、確かに少し、歴史的な責任感を感じたんだ。そのほかの要素としては、私はずっと底層の生活に興味があるからだ。都市にしろ、農村しろ、底層の生活は豊かで多彩で変化に富んでいる。彼らの生活は、ゴルフとかプールとか乗馬とか、そんなふうに画一化したものではない。彼らの喜怒哀楽はいつも極めて豊かで多彩だ。もちろん上層の生活を私は知らない。そんな生活をしたことはないから。もしかしたら彼らもすごいかもしれない。だが、私個人にとっては底層というのは色とりどりのものだと感じている。加えて言えば私自身も底層で生活している。

**南都** あなたは自分が底層で生活していると思っ

ているのですか？

**徐星** もちろんそうさ。最底層と言っていいくらいだ。よく友人に、「何が『三無人員』だ、俺などは『七無人員』だ」とふざけて言う。家無し、車無し、仕事無し、無職、社会保険無し、収入無し、墓も無しの「七無」だ、とね。

**南都** 現代というこの時代では、みんなが失業を恐れ、生活の保障がないのを恐れ、生活が不安定になりはしないかととても焦っています。あなたにはそうした焦りはありますか？

**徐星** ない。全くない。それは確かに私とは疎遠なことだ。そうした焦りやプレッシャーを感じない。そうした面での要求はとても低いからだ。本当に。私は、衣食が足りればそれ以上の大きな夢は見ない人間だ。もしも本当にたくさんのお金があったら、確実に、何をしたらいいのかわからないだろうね。生活ははるかに遠く、疎遠で、面白くないだろう！人の人生にそういうプレッシャーや焦りがあると、たくさんのお金を複雑化してしまう。中国人がよく言うように、早く白髪頭になってしまうよ。

**南都** でもドキュメンタリーを作るにはお金がないと難しいでしょう？

**徐星** そうさ。そうした状況は捉え方だ。たとえば金があれば、きっと農村まで車を借りて行ったり、撮影助手がいたりするだろう。もちろんそんな豪華な生活をしたことはない。でもそれもきっといいものだろう。だが、個人の立場から言えば、これを撮るときはそういうのとは違って、自分で撮影機器を背負って「多くの山を越え、風を食らい露に宿る」んだ。そのほうがそんな豪華なやり方をするより味わい深いと感じる。

**南都** あなたが撮った人のなかには撮影を断ったり、乗り気でない人もいますか？

**徐星** いたよ。話したくない人もいる。でも低層で彼らと付き合った経験があるから、自分なりのやり方で、彼らの警戒心を早く解くことができた。

**南都** どうやったのですか？

**徐星** 簡単なことだ。彼らとおしゃべりをする。彼らとまず生活や暮らしについて話す、奥さんや子供について、お酒について、村の幹部の腐敗について。ひとしきり話すと、彼らは基本的にカメラのことにあまり注意を払わなくなる。打ち解けるんだ。それで自然に意見を交わす。

**南都** あなたはこの映画がどういう様相を呈することを望みますか？

**徐星** どちらかというと散文的で、重苦しさがあり、悲哀があり、痛ましさがある。また小さな喜びも少

しある。基本的にこんな感じだ。

**南都** 私の記憶違いでなければ、最も早く撮り始めた「崖のほとりで君の表情を描く」から今まで数十年ですね？

**徐星** うん。2000年からだ。それは私の処女作で、初めて機器を持ってこの仕事を始めた。

**南都** それからドキュメンタリーを撮っていて、楽しいですか？

**徐星** うん、やりがいがある。創作でもあるからね。創作の喜びがある。

**南都** こうしたやりがいと小説の創作での感触は何か違うところがありますか？

**徐星** 相通じている。基本的にどちらも、組み立てる過程で疲れるほどハードルが高くなり、ああしたりこうしたり試行錯誤し、こねくり回してやっていく。それで出来上がったものは、自分がつくり出したという喜びがとても強い。もちろん小説に限らず、撮影でも、実のところより楽しいのはその過程だ。完成したものがいいか悪いか、それは他の人のことだ。それはきっと画家、音楽家などでもみな同じだろう。本当に芸術を愛する人ならそうした創作の悦びは同様だと思う。それじゃなぜ小説を書かないかという、映像のほうが速い、非常に速く自分の多くのことを表現できると思うからだ。小説を書くには沈澱させなければならない。ゆっくりと時間がかかる。中国の変化は、とても豊かで多彩で一つ一つ目を向ける暇がない。すべてが変化のただなかだ。政治、経済、文化、社会、生活、さらには人間関係、また、中国全体のイメージも極めて大きな変化が起きている。映像はこうした変化を撮影機一つで素早くリアリティをもって記録できる。ここに違いがあると思う。小説は息の長い仕事だ。私が老いて、機器を担げなくなり、走れなくなったら、そのときに書いてもいい。また、今記録している素材について書いたっていい。そういう関係だと思っている。

**南都** つまりドキュメンタリーを撮ると創作の経験は相通じているということですね？

**徐星** もっと言えば、私にとってドキュメンタリーは文学なんだ、表現の伝達手段が異なるだけで。「文革編年史」はとてもプライベートな物語だろう。文字で書いたら一篇の悲劇的な物語を描いた小説にな

るだろう。一人の少年が一通のラブレターのためにその一生を壊されたという。もし今撮っているのを全部記録したなら、それは「文革」期の農村の様子を描いた小説になるだろう。だからその差というのは、筆で書くか、撮影機で表現するかの違いだよ。

**南都** こういう言い方がありますね。中国映画は大器にならないが、この時代のドキュメンタリー映画は大いになすところがある、と。

**徐星** うん。私はかなりこいつに入れ込んでいます。もちろんこれも何ら利益をもたらさしはしない。ただこの創作の過程がとても楽しいんだ。この過程で一人有頂天になって、「これはよく撮れた、すごいぜ、やった！ こんなことを考え付くなんてすごいぜ」と思うことがある。でも数日経つと「こんなのダメだ！」とまた自分を否定する。これは正常な過程だと思う。小説を書く時も、「こんなことを思いつくなんてすごいぜ」と思う。数日するとそれが変わって「これは自分が書いたのか？ こんなにひどいものを」と。同じことだ。こうした練磨がとても面白い。これこそ芸術の創作が闘う相手だと思う。疲れ、困憊する。でも心地がよい。自分の生活の中にこうした心地よさがあるなら、それ以外に何か必要なのか、と思う。そうだろう？ 何もいらぬ、うらやましがることもない、嫉妬もない。

**南都** あなたはどんなドキュメンタリーを撮りたいと思いますか？ 何か野心はありますか？

**徐星** 人文・歴史的なテーマに興味がある。といっても大舞台、大事件には興味はない。たとえば、王兵が撮った『鉄西区』に人々は注目している。彼はこの地区全体を何年もかけて撮った。十年間の労働者のレイオフ、国有工場がどう変化したかといった変化の全体を撮った。こういったことはあまり興味がないし、私の関心を引く範囲ではない。私が関心を向けるのは人、私は人物を撮るんだ。この角度というのは小説により近い。

## 現在の生活

**南都** あなたは若いころ自転車で中国の大半を見て回ったと、かつて『在路上 [オン・ザ・ロード]』という本で触れています。こうした状態が自分を夢中にさせる、と。だんだんと年齢を重ねてこれ、こうした状態はまだ続きそうですか？

**徐星** まだ続く。今でもどこかへ出かけていくことを考える。2匹の大きな犬に車を引っ張るよう訓練して、歩いて出発する。犬というのはなかなかよく耐えられるんだ。エスキモーは犬がそりを引いているだろう？ 頭の中にはいろんなプランがある。この車をどう軽くするか、どう犬をつないでいか、どうやってテント、衣服、持ち物を積み込むか。撮影機はこの車に載せていく。もちろん、おそらく専門の人にこの車の設計を頼まないといけないだろう。それで行く先々を撮っていく。なかなか面白いと思わないか？ だが俺はこの夢を実現できていない。やるのがたくさんあり過ぎ、離れられない。

**南都** ドキュメンタリーには毎日どのくらいの精力を注いでいるのですか？

**徐星** すべての精力を注いでいる。寝て食べて、買い物に行く以外は、ずっとこれをやっている。すでにずいぶん長く遅らせているからね。それまでは家でいろんなことがあった。母の看病で、ベッドから長い間離れられなかった。その後、母が亡くなった。それからまた出国し、ずいぶんと時間がかかってしまった。だから基本的なひな形はもうできているが、速度を上げて、これが終わったら来年また浙江に戻り、あるおばあさんのラブストーリーを撮りたいと思っている。それを撮り終えたら、また編集して半年から1年かかる。だからなかなか時間が足りない。

**南都** 今の生活の仕方あなたは満足していますか？

## 今後の研究会予定

**4月例会** 4月26日(木)午後19時～、専修大学神田校舎1号館5階ゼミ52、矢吹晋「天安門事件30周年に当たり、中国電

脳社会主義を語る」／**6月例会** 6月28日(木)午後19時～、専修大学神田校舎1号館5階ゼミ52、土屋昌明「日本人は六四天安門事件をどう見たか—文革時期との比較もふまえて」

**徐星** 満足している。生活への要求はそれほど高くない。生きていて、自分が楽しいことをしていれば、あるいは自分を愉しませることができればそれでいい。もし生活に真の意味があるのならば、これこそがそうなのではないか？ このほかに何かがあるのか、私には本当にわからない。もちろんそこに本当に真の意味があるのか断言はできない。けれども、私にとってはおそらくそうなのだ。

**南都** あなたはずっとこの国で生きていくと思いませんか？

**徐星** そう思う。国外はもうずいぶんと詳しくなった。国外には帰属感がない。中国語を話してくれる人もいない。生活はまずまず悪くないかもしれない。でもやはり文化の空漠がある。

**南都** あなたが今、目にしているものと、あなたが若いときに目にした世界とで、本質的な違いは何かありますか？

**徐星** 本質的にはない。変化はみな外在的なものだ。たとえば経済が発達し、技術のレベルも上がり、ハイテクは生活の方式に何らかの変化を与えただろうし、人と人との間の交流の方法も大きな変化が起きただろう。だが、本質的には別に変わっていないと思う。やはりあるのは喜怒哀楽、生と死、生と死だ。

**南都** あなたはここ何年かで何か変わったと思うことはありますか？

**徐星** ある。とても大きく変わった。どんどん老いていく。心のありようは何ら変わっていないのに。ずっとこんな感じで、こうして生きてきた。変えようともあまり思わない。どう変えるのか。自分の生活 방식に誇りを持っている。本当だ。ほかの人はわからないが。生活における愉しみは結構多いよ。愉しみが多いということは、ある意味で、必要な多くの事柄については憂慮することも不必要ということなんだ。

**南都** とんとん年老いていく。あなたは老いることを恐れますか？

**徐星** 恐れていない。老いることをどうして恐れるんだ？ 死さえ怖くないのに老いなど恐れない。

\*\*\*\*\*

徐星が未来に宛てて書いた微博にはこう書かれている。「抗ってみることは、屈服することより自らの生活をより愉しく、豊かで多彩なものとしてくれるだろう。少なくとも自分に対して抗ってみてはどうだろうか」。

(南都記者 李昶偉)

「南方網 [南方都市報のウェブサイト]」

2012年12月3日配信

<http://www.zgnfys.com/a/nfwx-38256.shtml>

例会 (2018年4月26日) 発表予稿

## 天安門事件30周年に当たり、中国電腦社会主義を語る

矢吹晋

来る2019年は1989年6月4日の天安門事件以来30周年に当たる。この事件と事件後30年の中国の歩みを再考してみたい。

### I. 天安門事件に関わる資料の編集について

当時、私は仲間と共に、資料集「チャイナ・クライシス」シリーズを編集した。このシリーズには以下のものが含まれる。①『チャイナ・クライシス重

要文献』全3巻、これは代表者矢吹の名を編訳者としているが、実際には矢吹のほか、白石和良、村田忠禧、そして蒼蒼社社主の中村公省が編集に参加している (ともに1989年、蒼蒼社)。②上述の全3巻の出版後、われわれ4名 (白石、村田、矢吹、そして中村) は資料集を分析する作業に取り組んだ。その結果が『天安門事件の真相』全2巻 (ともに1990年、蒼蒼社) である。上巻には矢吹の「天安門事件の政治的プロセス」「天安門事件の軍事的プロセス」

が収められている。下巻には「一九八九年春の中国学生運動」(村田忠禧)、「デマ」と「錯覚」と「天安門事件」(白石和良)、「北京における虐殺の真相」(ロビン・マンロー著、矢吹晋訳)が収められている。③村田忠禧は得意のパソコンを駆使して『チャイナ・クライシス「動乱」日誌』を編集した(1990年、蒼蒼社)。この日誌編集の意図を村田は「あとがき」でこう記している。「1989年の天安門事件についての実証的解明を行うためには、出所を明示した克明な「日誌」を至急作っておく必要がある、という企画を立てたのは中村公省氏と矢吹晋氏である。さすが『毛沢東著作年表』(京大人文学研究所刊)を世に問うた両氏である」[村田は1989年]5月の『人民日報』の民主化要求運動の報道ぶりに興味を持ち、記事のタイトルを日誌風にワープロに入力していた。それが両氏の目にとまり、白羽の矢が立ったという次第である」「ワープロでデータを入力、パソコンでそれを処理、とかねてから実践したいと思ったことが実現でき、しかもその威力を体験できたことは大きな収穫であった」(259～260頁)。この『動乱日誌』は後日、中国の当時の活動家が愛用していると聞かされて驚いたことがある。この日誌は1989年1月6日～6月30日の77日間のものだが、さまざまな個人、組織の動きが時間ごとに整序されている。これが活動家自身にとって、みずからの行動の前後の動向を確認するうえで役立つという証言だ。大量のデータ処理を中国研究の場で実践した嚆矢であろう。④『チ

ャイナ・クライシス WHO'S WHO』(この編者は三菱総合研究所とされているが、実際には高橋博(当時ラジオプレス勤務)である。1990年、蒼蒼社)。

⑤『中国における人権侵害』(1991年、蒼蒼社)。これはアムネスティ・インタナショナルの報告書「1989年6月の虐殺とその余波」(矢吹晋訳)、ロビン・マンロー「処罰の季節—戒厳令以後の中国における人権」(矢吹晋訳)、「中国における被入権抑圧者リスト」(福本勝清訳)からなる。

以上のように、われわれ蒼蒼社グループは5種類、都合8冊のブックレットを編集し出版した。<sup>1</sup>

### [補論1]

#### 朝日新聞社内報の伝えた真実と本紙の伝えた虚報<sup>2</sup>

『蒼蒼』33号(90年8月)でマンローの最新論文「天安門広場の回想」を紹介しつつ、6月4日午前3時、軍隊に包囲された後の天安門広場の内部にいた西側ジャーナリストとして、ロビン・マンローを含む11名の氏名を挙げた。これに対して、事情通の方々から早速クレームが来た。私がマンロー論文を紹介する形で列挙したほかにも、日本人記者がいたはずだというのである。これには驚いた。そこで「ぜひその話を聞きたい、もし書いたものがあれば、ぜひ見せて欲しい」と頼んだ。というのはマンローの受けた非難と似ていて、『天安門事件の真相(上)』で書いた内容に対する外野席の声はたいへんなもので、「あんな細部にこだわる意図が分からない」「動

1 英書 Tiananmen Papers(『天安門文書』)に対するコメント。『朝日新聞』2001年1月16日朝刊「本物説、矢吹晋横浜市大教授 趙氏派幹部が持ち出す」[文書は本物と思う。歴史的な事実、流れに沿っているオリジナルの資料でしょうね]

天安門事件とその後の動きに詳しい横浜市大の矢吹晋教授はこう語る。もう一つ根拠に挙げるのは、趙紫陽総書記がトップの座にあったことだ。「趙氏の部下たちは党の重要文書を扱う党中央書記局を握っており、内部文書を自由に入手できた。彼の失脚後、彼につながる人たちは逃げた。今回の文書は事件当時に持ち出したものでしょう」。米国に持ち込んだのは「張良」というペンネームの中国人とされる。時期は明らかでない。この男性は米国のテレビ番組にも出演したが、顔が分からないよう細工されていた。なぞめいている。矢吹教授はいく。「内部文書の持ち出しは、その後は秩序が整い、引き締められたから絶対できないはずだ。直後の混乱期に趙紫陽派の幹部が持ち出すのは、簡単だったと思います」。なぜ、いまなのか。「当時はみな知っていたことで、発表する値打ちがなかったからだ。別に目的があると思います」。矢吹教授は、(1)文書を持ち込まれた米国の大学教授は、毛沢東主席の私生活を描いた元侍医の著作で解説を書いた、(2)もう一人の大学教授は天安門事件の直後に反体制学者の方励之氏を北京の米大使館に連れていった——と指摘し、政治的なおいを感じるという。「彼らは民主化を期待したが、何も起きず、中国の民主化運動の基盤はなくなった。クリントン政権は中国となれあひすぎたという声や軌道修正の動きもある。ブッシュ新政権の中国政策に影響を与えようという一種のロビー工作だ」。香港や台湾の新聞に載った文書の用語がおかしいとの声も強いが、矢吹教授は「中国語版を持っておらず、英語版を翻訳して報道した」とみる。春に出版する香港の出版社が「英語版から翻訳するのではなく、中国語資料に基づいて出版する」と発表しているため、出版社は中国語の本物を入手しているとの見方だ。資料的な価値について矢吹教授はこういう。「天安門事件もいずれ現代史の中で位置づけられる。歴史を考えるうえで、基本的な文献が整理されて出るとは悪いことではない」。

2 逆耳順耳、『蒼蒼』第三五号〔九〇年一二月一〇日発行〕

機不純である」「中国当局に迎合してあんなデタラメを書いたに違いない」「あいつは×××主義者だからあんなバカげたことを書いた」「真相が分からないときに、断定するのは研究者として軽率である」「仮りにその分析が正しいとしても、民主化運動にマイナスである以上、当面は書くべきではない」その他、その他。北京在住の日本人の間で、天安門事件を体験した人々を「戦中派」と呼ぶことが行われているが、その戦中派の間での私への酷評はたいへんなものだったらしい。罵倒を耳にした私の友人が「魔女狩りの雰囲気」と嘆いたほど。紆余曲折を経て（念のために書いておくが、私は朝日の中国担当記者のなかに友人は少なくないが、これらは友人から得たものではない。私は友人を窮地に追い込むことはしない）、複数の筋から資料が届いた。その一つが『朝日人』（1989年8月号、朝日社報、別冊346号）。「これは社外秘じゃありませんか」と私が危惧すると、「いやあ、これは“社内秘”というものでしょう。社員とOB全員に配るものですから、公然の秘密でしょうな」とくる。さすが新聞社だけに反応が素晴らしい。同誌「激動の中国特集」8～10頁に朝日教之カメラマン（東京・写真部）の証言が載っている。「“血の日曜日”再現、カメラマンの目、ストロボ発光に銃口キラリ、記念碑の学生へ乱射はなかった」——これがタイトル。一部を引用してみよう。——午前4時。広場のすべての証明がいっせいに消えた。市民たちが「ウォー」という叫び声を上げながら南東の出口に向かって走り出した。いよいよ軍隊が入ってくる。（中略）突然、闇の中に置かれた恐怖感は想像以上だった。このまま逃げ出してしまおうと思った。——午前4時40分。広場の証明が再び点灯した。暗闇に慣れた目には昼間のように明るく感じる。ふっと見ると人民大会堂の方から、銃を手にした数十人の兵士たちがゆっくりとこちらに向かって進んできていた。草色のヘルメットのにふい光が、歩くたびにちらちら揺れて、恐怖感をかきたてる。——英雄記念碑のすぐ近くまで軍が迫った時、学生たちがいっせいに退去を始めた。数百人の学生が列を作って順番に引き揚げる。毛布や食糧などを持って整然と出口に向かう。一部の報道で、戒厳部隊は記念碑に座り込んでいる学生に向かって

銃を乱射し、数百人が一挙に殺されたと伝えられているが、その事実はなかった（A）。威かく射撃や流れ弾、戦車にひかれて広場で死んだ学生は（おそらく数十人の単位）でいると思うが（B）、数百人の大量虐殺はなかった。もしそうだとしたら、学生のなかにいた私は今ごろ死んでいるはずだ。北京市全体の死者は何千人と言われている。しかし広場そのものではそれほどの死者はなかった（傍点は矢吹）。（A）はカメラマンが目撃した事実である。（B）は「思う」である。他の情報に基づいた推定であることに注意したい。同誌はさらに朝日教之カメラマンのカラー写真6葉を掲載している。そのうち撤退とかかわるものは3葉。①「学生に向けて威嚇射撃をする兵士。後ろは人民大会堂。午前4時45分」。②「人民英雄記念碑に座り込んでいた学生を排除した兵士たち。午前5時」。③「手をつないで最後に退却する学生たち。このあと次々と装甲車が。午前5時30分」とそれぞれにキャプションがついている。同誌11～12頁には、もう一つの証言がある。「助っ人奮戦記、外報部員の目、忘れられぬ“栄養ドリンク”、広場で学生と運命共同体を実感」のタイトルのもとに永持裕紀記者（外報部）の証言があります。読者よ驚くなかれ、この記者もまた人民英雄記念碑にへばりついていて学生撤退の最後の光景を目撃しているのだ。「——4時40分に記念碑に現れた兵士たちが持つ本物の武器の迫力は、想像以上だった。威嚇射撃をすると、ターンターンという銃声がだだっ広い広場に響きわたる。これを間近でやられた学生たちの恐怖は相当なものだったはずだ。ギャーといった叫びは聞こえなかったが、多くは下を向いて、必死に耐えている様子だった。何が次に来るか、と小さな私も怖かったが、兵士が学生めがけ機関銃を乱射——ということはなく（A）、学生たちは退去を命じられた。学生がそろそろ記念碑を後にするのに私もそのまま従った。——「天安門広場の虐殺」というフレーズがよく使われる。今回の惨劇を象徴するものとしてそれはそれで良いと思うが、「虐殺」は実際は広場の外の北京市街地が主な舞台だった。広場、特に人民英雄記念碑は新中国の中心の中心。そこを真っ赤に染める戦略を、さすがに中国指導部は取らなかったのではないかと推測してみる（B）（傍

点は矢吹)。さてさて読者はこれら二つの証言をどう読まれたか。むろんこれは『朝日新聞』の本紙には登場しておらず、逆に89年6月8日付には後にその信憑性が疑われた清華大学学生柴玲の証言（香港『文匯報』6月5日付）が訳されている始末だ。私は唾然とした。文字通り言うべき言葉なし。両氏の証言が「社内報」ではなく、本紙に掲載されていたら、広場の真実は89年8月の時点で、日本の読者に広く伝わっていたはずだ。分からないのは、報道機関がその商品としてのメディアにおいては虚報、あるいは不確実な報道を行い、それを訂正することなく、内輪の印刷物で真実を語るというのは、ということなのか。迅速を旨とする報道の場合、誤報は避けがたい。だからこそ誤報が判明した場合、それを訂正するシステムが必要である。いま私は、誤報自体より（それも大きな問題だが）、誤報と知りつつ、それを本紙で訂正することもなく、内輪の雑誌で訂正してみせた姿勢に驚愕しているのだ。これでいいのか。もっとも、間接的な誤報訂正は多少ある。たとえば90年6月3日付『朝日新聞』は「1周年を機に“天安門”問う本」（無署名）と題した書籍紹介のなかで、われわれの資料集や『真相・上』を紹介した。また11月10日付夕刊では「天安門事件論争その後、実像つかむ難しさあぶり出す、“広場での虐殺”前提には疑問」（大阪学芸部荒谷一成記者）の論評のなかで、『真相・上下』や『重要文献・第3巻』を紹介している。誤報訂正の機会は何回もあったはずだ。

①米ABCテレビが「ナイトライン」と称するレッド・コッペル司会の番組で、ABCの取材チームが写した膨大なビデオを分析して「天安門広場での虐殺はなかった」と報じた89年6月末。②中国当局がさまざまな証言を用いて声明を発表した際のコメントの場。③無血撤退のために努力した侯徳健らの証言が発表された時点。④われわれの『チャイナ・クライシス重要文献』第3巻が出版された89年12月。⑤天安門事件一周年記念。これらいくつかのうち、ポイントはやはり『朝日人』の出た89年8月前後だろう。唯一ではなく、2人の社員の目撃証言があるのだから、自信をもってできたはずだし、この段階でマンロー、

ネイションズ組のような目撃証言探しをやれば、大新聞の取材能力からしてマンローらより徹底的に探せばはずだ。もう一つ証拠を挙げよう。『調研究室報』（第83号、朝日新聞社調査研究室、隔月刊、社内用、1989年12月5日）の56頁にこう書いてある。「天安門広場の学生たちは最終的には自主的に撤退、天安門広場の中心である英雄記念碑付近では基本的に血は流れていない。この点についてはたしかに当時の報道は正確ではない」（西園寺一晃「中国の近代化、民主化運動と権力闘争（下）」）。この雑誌の刊行時点は89年12月。私が『読売新聞』（89年12月4日夕刊）に一文を書いて、袋叩きに遭っていたころだ。もう一つ教訓がある。日本のマスコミはむろん朝日だけではないから、天安門事件の取材に出かけたジャーナリストたちは相当な数に上るはずだ。これらの諸社がまさか人民英雄記念碑という現場に記者を配置することにすべて失敗したわけではなからう。もしかしたら、ほかにもまだ名乗り出ていない目撃者がいるのかもしれない。朝日は記者の配置という点では大成功だが、宝の持ち腐れとなった。教訓はこうだ。「新聞社の社内報から目を離すなかれ」。（前項のマンローとの対話の折に、私が天安門広場に残留した2人の日本人ジャーナリストの名を固有名詞で挙げたところ、彼は他にフランス人がいたことも事後に分かったと追補した）。

## II. 天安門事件10周年の夏——「体制改革」の比較研究：ハンガリーと中国<sup>3</sup>

私は1999年夏休みの40日をハンガリーのブダペストで暮らし、途中ワルシャワやザグレブに数日でかけた。ベルリンの壁が89年11月に崩壊する直接的契機となったのは、オーストリア国境に近いハンガリーの町ショブロンで開かれた「ヨーロッパ・ピクニック」である。これはきわめて慎重に計画された奇策である。ハンガリーは東欧圏のなかでも西側へのショーウィンドウとして、カダール体制のもとでも、他の東欧圏には見られない自由を享受していた。バラトン湖周辺の避暑地には多くの東独市民が避暑にでかけ、そこへ同じく避暑にきた西独市民と

3 矢吹晋「ブダペストで中国の未来を考える」『大航海』1999年12月号、102～109頁。

の間に、国境を越えた肉親の再会の場をハンガリーは提供していた。ハンガリーは東独からの観光客を兄弟国として受け入れる。しかし兄弟国としての仁義から彼らを西独へ出国させることはしない----これが約束事であった。ハンガリー国内を監視するためにソ連軍6万人が駐留していた。これらの軍隊が動けば1956年のハンガリー動乱、あるいは1968年のチェコスロバキアにおけるプラハの春に対するソ連軍介入事件の二の舞は明らかであった。ハンガリー政府はさまざまな根回しのあと、89年9月11日オーストリア国境の有刺鉄線を断ち切り、西側への門戸を開き、東独を見捨てた。東独には当時40万人のソ連軍が駐留していたが、ゴルバチョフはこれを動員しなかった。

1989年6月4日における中国の選択と9月11日におけるハンガリーの選択は鮮やかな対照を示しており、ゴルバチョフの勇氣と鄧小平の蛮勇はながらく繰り返し対比された。ショプロンの門戸開放がまもなくベルリンの壁を崩して東西ドイツの統一を導いた。これによってヨーロッパにおける冷戦体制は終焉し、人々は平和を祝福しつつ、アジアに残る中華人民共和国と中華民国の対立、南北朝鮮の対立を憐憫の表情で語り続けた。私はこの夏、ヨーロッパにおける冷戦の終焉と、アジアにおける未完の冷戦終焉とを対比して、深い思いに沈んだことをいまも鮮やかに記憶している。これを契機としてハンガリー、チェコ、ポーランドはEUに加盟したが、その後EUは英国の脱退等により困難に直面している。この頃、世界で最も強く叫ばれたキーワードが蘇東波<sup>4</sup>、すなわちソ連東欧に発する民主化の波がいつ中国に及ぶか、であった。現在、ソ連東欧で生じている現象は「明日の中国の姿である」と見る風潮は全世界を覆っていた。私もまたその文脈で中国を観察していた。

### Ⅲ. 天安門事件20周年——「蘇東波」ツナミの終焉とその背景

『読売新聞』（2009年5月27日付）は、藤野彰編集委員による矢吹晋に対するインタビューを次のように伝えている。

——天安門広場での武力鎮圧をどう回顧するか。

矢吹 今振り返ると、結果的に当局が強硬策に出たのは仕方なかった側面もある。当時、共産党指導部は改革派の趙紫陽総書記グループと保守派の李鵬首相グループに分裂し、民主化運動をうまく収拾できずにいた。一種の無政府状態だった。このため、最終的にあのような惨事に立ち至った。しかし、解放軍を動員する必要はなかった。警察で十分対処できたはずだ。

——いまだに事件の位置づけは見直されていない。

矢吹 共産党が民主化運動の武力鎮圧を「誤り」と認めた場合、学生を支持して失脚した趙紫陽元総書記や、それ以前に「ブルジョア自由化」に甘かったとして失脚した胡耀邦元総書記の名誉回復という問題が出てくる。指導部には、一つでも既定の見解を覆せば、見直しの動きがドミノ式に広がるとの懸念がある。趙紫陽失脚を受けて政権トップの座に就いた江沢民前総書記や李鵬元首相の存命中は事件の名誉回復は無理だ。

——この20年の中国の歩みについては。

矢吹 「大砲かバタールか」という目で見ると、天安門事件後、中国は明らかに大砲路線をとってきた。基本政策は軍事重視、民生軽視だった。国防費が21年連続で2ケタの伸びを示す一方で、公平な税制に基づく、適正な富の分配は実現していない。この間に中国もかつての韓国や台湾のように開発独裁から民主化への道を歩むと思っていたが、予測は裏切られた。

——共産党の口癖は安定重視だ。

矢吹 20年を前半と後半に分けて考えたい。前半の92年初春、鄧小平は広東や上海を視察した際に行った「南巡講話」で改革・開放の加速を指示し、同年秋の第14回党大会で「社会主義市場経済の確立」を提起した。つまり、政治改革よりも経済改革を優先するという路線を敷いた。後半、経済実力は一段と高まり、2001年には世界貿易機関（WTO）加盟を果たした。前半は安定団結を重視せざるをえなかったにしろ、後半は政治改革の条件がある程度整った。だが、既得権益層の抵抗が強く、改革に着手で

4 蘇東波とは、いうまでもなく詩人蘇東坡の一字変えたもじりで、ソ連東欧に発した民主化の大ツナミの意である。

きずにいる。

——民主化要求はくすぶっている。

矢吹 昨年末、知識人や作家が一党独裁の放棄を求め「08憲章」<sup>5</sup>を発表したが、これは政治運動のためのプログラムではなく、一種の立場表明のようなものだった。今は民主化要求の集会やデモを行ったとしても、拡大する前につぶされる。当局の統制も巧妙で、全国的な運動組織は成立しえない。現状では89年のような大規模な民主化運動が再燃する可能性は低い。

——中国と米国の力関係も20年前とは大きく変わった。

矢吹 20年前、中国は政治的にも経済的にもどうころぶか分からないという移行期にあった。だから、米国も人権問題などで対中圧力をかけやすかった。しかし、その後、中国は経済的な存在感を大きく高めた。安全保障面でも北朝鮮核問題をめぐる6か国協議に見られるように、米国の重要なパートナーになった。今や米国は中国の力を借りて東アジアの安定を守るしかない。中国が民主化で混乱するよりも現状の安定を望むというのが米国の本音だろう。

#### IV. 天安門事件30周年

——習近平の電腦社会主義が誕生し、民主化の課題は未知のルートによって担われる方向性が生まれつつある。いまやビッグデータやAIの役割を活用しない社会運動はありえない新時代が到来した。

①中国はいわゆる蘇東波の影響を受けて、東欧諸国が「脱社会主義の道」を選んだように民主化への道を歩むと予想するのが大方の見方であった。他方では、いわゆる「開発独裁の段階を経て政治的民主化へ」の道を歩んだ韓国、台湾、香港、シンガポールのアジア四小龍の道と重ねて論じられることも多かった。より具体的にいえば「社会主義市場経済」

という矛盾をはらむシステムは、「市場経済の発展という下部構造」が「社会主義政治体制という上部構造」を掘り崩すことになるとみる下部構造決定論的解釈を矢吹は予想していたが、これは誤っていた。市場経済の発展は、社会主義体制を動揺させるのではなく、むしろそれを強化しつつあるのが今日の姿である。

②経済成長が庶民の生活を安定させていることからして「民主化運動が再燃する可能性は低い」と政治情勢を認識しつつも、「政治改革の条件」がある程度整ったにもかかわらず、改革に着手することがないのは「既得権益層の抵抗」が強いためかと認識していたのも誤りであった。中国共産党の指導部には、そもそも政治権力を放棄する意向はなく、社会主義を経て共産主義へ至る「共産主義への道」を堅持する立場が主流であり、民主化を要求する潮流は一部の反主流にすぎないことがいまや明らかだ。彼らは社会主義の初心を忘れまいと誓っている。この立場は江沢民、胡錦濤のリーダーシップの下では秘められていたが、習近平は「新時代の社会主義」思想とともに、その目標追求を声高に語るようになった（鄧小平流の「韜光養晦」路線の終焉）。

③米中関係については、たとえば北朝鮮核問題をめぐる6か国協議が示すように、「米国は中国の力を借りて東アジアの安定を図る」「中国の民主化よりは現状での安定を望む」立場と認識していた。この相互依存、相互補完体制を矢吹は「チャイメリカ体制」と名付けた。いまや経済力と軍事力の強まりを背景として、バクス・アメリカーナに代わって、バクス・シニカを要求する声が高まりつつある。英『エコノミスト』の予想によると中国は2020年にGDP面で米国を超え、2025年にはAI（人工知能）において米国を超える予想している<sup>6</sup>。

④東欧民主化への道と中国社会主義堅持の道との違いはなにか。一つは、中国の社会主義的市場経済

5 これを首唱したのは、いうまでもなく劉曉波（1955～2017）だが、彼の宣言の原点に天安門事件当時の「ハンスト宣言」があることを指摘した論者は日本にはいなかった。人々は劉曉波ら4人組が紛争の渦中に身を投じたことで天安門広場における流血を回避できたことをほとんど忘れていた。最悪は『朝日新聞』1989年6月5日朝刊である。劉曉波の役割を忘れて柴玲の根拠なき流血論を紙面に大きく掲げた。詳しくは補論1を参照。

6 The battle for digital supremacy, The Economist, 2018年3月17日号、Artificial intelligence in the workplace, The Economist 2018年3月31日号。

の成功である。これによって中国経済は、ドイツ、日本を超え、2014年にアメリカに追いつき、チャイナ・アズナンバーワンの地位を得て、中国の人々は大きな自信を得た<sup>7</sup>。もう一つはアメリカ資本主義の動揺である。2008年のリーマン恐慌<sup>8</sup>は「ソ連解体後のアメリカ人勝ち」に奢る米国経済を奈落の底に突き落とした。中国政府の宣言した4兆元財政支出は世界経済の救援策として高く評価された。この事件を経て、中国の人々が抱いてきた対米コンプレックスは一挙に吹き飛ばされた。

⑤ 2017年の共産党大会および2018年の全人代を経て、習近平指導部は権力を固め、新時代の社会主義を採択した。その内容は電腦社会主義である。かつてハイエクやコルナイが批判してきた計画経済の困難性（補論 2 参照）は、21世紀の科技AIによって克服できる見通しが切り拓けている。これが天安門事件30年後の中国内外の現実である。ここから再考すると、天安門事件とは、中国社会主義の発展にとって基礎を固めるための踏み石にすぎなかったように見える。

## [補論 2]

1920年代から30年代にかけて、オーストリア学派の間で、経済計算論争（economic calculation controversy）が起り、社会主義経済の可能性について肯定派と否定派との間で論争が繰り返された。オットー・ノイラートの「戦争経済から実物経済へ」に対して、ルートヴィヒ・フォン・ミーゼスが「社会主義共同体における経済計算」で反論したことが発端である。社会主義経済において、生産手段は公のものとなされ、生産量は国家が決定するため、市場や価格は存在しないことになる。このような経済が現実実現できるのか。ミーゼスは、貨幣が存在しない（労働証券が想定された）とすれば、価格もつけられないから、計算不能として可能性を否定した。フリードリヒ・

ハイエク（1899年5月～1992年3月）は、計算についての「すべての情報が集まらない以上、計算は不可能だ」とした。ミーゼス、ハイエクの不可能論に対し、オスカー・ランゲ（1904年7月～1965年10月、ポーランドの経済学者）は、市場メカニズムを社会主義経済に導入することで社会主義は可能だと反論した<sup>9</sup>。すなわち潜在的な交換の可能性があればシャドウ・プライスという形で擬似的、便宜的に価格をつけることが可能である、ランゲはワルラス流の一般均衡理論の枠組みに則って多財の需給の連立方程式の解を求めることで、効率的な価格付けと資源配分を達成できると考えた。ハイエクの立場はランゲのような計算が技術的に可能であるとしても、この計算を実施する中央計画当局は計算に必要な需給に関する膨大な情報を収集せねばならず、そのような「情報の収集は不可能である」というものであった。しかも計算に必要な情報は主として「経済主体にとって自身しか知らない私的情報」であり、「個々の経済主体が情報を正しく伝達するインセンティブを持つとは限らない」。ハイエクの見るところ「必要な情報の収集に成功し効率的な価格付けと資源配分を行えるのは分権的なメカニズムとしての市場メカニズムだけである」という展望であった<sup>10</sup>。

さて、21世紀の今日、ビッグデータは、ハイエクの計画経済不可能論の重要な論拠を突き崩したことになる。すなわち、完全にすべてとはいえないが、①社会科学から見た大数の法則としてほとんどすべての情報は入手できる。②しかもそれは、ハイエクの説いた経済主体にとって自身しか知らない私的情報を含めての話である。

ハンガリーの経済学者コルナイ・ヤーノシュが『不足の経済学』（盛田常夫編訳、岩波書店、1984年）で分析したのは、主として消費財の不足問題として現象する「ソフトな予算制約」という計画経済の矛盾

〔(20) ページにつづく〕

7 矢吹晋『中国の夢 ---- 電腦社会主義の可能性』花伝社、2018年3月、第2章「移行期の中国経済の高度成長」32頁以下。

8 矢吹『中国の夢』74～76頁。

9 ウィキペディア、オスカー・ランゲ。https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AA%E3%82%B9%E3%82%AB%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%B2

10 ウィキペディア、フリードリヒ・ハイエク。https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%83%89%E3%83%AA%E3%83%92%E3%83%BB%E3%83%8F%E3%82%A4%E3%82%A8%E3%82%AF# 経済計算論争と市場メカニズムの特性

# 胡傑監督『林昭の魂を探して』字幕(その7・最終回)

土屋昌明 編訳

[前号からのつづき]

## 130

解説：1965年由上海提籃橋監獄所寫的：林昭在服刑改造期間重新犯罪的主要罪行中這樣記載到：林犯關押幾年來，一貫拒不接受教育，書寫了大量的反動血書，如《靈耦絮語》(約十八萬字)《基督還在世上》《不是練習——也是練習》《練習二》《練習三》《鮮花開放在悲壯的五月》《囚室哀志》《秋聲辭》《自諫》《血詩題衣》《血衣題跋》等數十萬字。雖經工作人員多方教育，並採取了單獨關押，專人負責管教，家屬規勸等一系列管教措施，但林犯死不悔改，公開揚言：永遠不放棄宗旨而改變立場。

解説：1965年に提籃橋監獄が書いた報告に、林昭が服役改造期間中に新たに犯した罪として次のように書かれている。「拘禁の数年間、ずっと矯正を拒み続け、大量の反動的な血書を書いた。たとえば『靈耦絮語』(約18万字)、『キリストはまだこの世に』『練習ではなく一練習でもある』『練習二』『練習三』『鮮花は悲壯な五月に咲く』『囚室哀志』『秋声賦』『自諫』『血の詩を衣に題する』『血の衣の題跋』など数十万字。いろいろと教育し、独房に拘禁し、専門家の矯正や家族の説諭など一連の教化を施すも、林昭はあくまで悔い改めず、絶対に転向しないと公言した。」



## 131

上海茂名南路159弄11号。这是林昭在上海和母亲、妹妹、弟弟所住的房子。

上海茂名南路159番11号。林昭が上海で母親・兄弟と住んだ部屋。

問：哪一間房子？

倪競雄：请你开一开门，我说明一下。

問：这是原来许宪民住的家，我们来纪念她，出本书，拍一下她的故居。

現住戸：許憲民是誰啊？我不知道。

倪：是這的住戸，原來的住戸。

胡傑：どの部屋ですか？

倪：開けて下さい、お願いがあります

胡傑：ここはもと許憲民が住んでいた家で、彼女を記念し、出版するので撮らせて下さい

住人：許憲民なんて知らないよ。

倪：ここに住んでいたんです。

倪競雄——原上海沪剧团编剧、林昭苏南新闻专科学校的同学。

倪競雄、もと上海劇団脚本家、林昭の蘇南新聞學校時代の友人。

問：倪老师，你以前就是到这里来的吗？

答：一直到这来，经常来。

問：到林昭这来、到她妈妈这都是这里吗？

答：还有很多人到过这里，张春元他们都是到过这里。你来看，这窗框是当时的，这的距离好像还要拉开些，窗框还是那个窗框

胡傑：あなたは以前ここにきていたんですか？

倪：いつも来ていた。

胡傑：林昭と母親らもここに？

倪：ほかにもたくさんの方がここに来ていた。張春元たちもここに来ていた。見て、この窓枠は当時のものだ。ここはもう少し離れていたが、窓枠はそのままだ。

## 132

許憲民 一九三六年第三战区 上海淞沪三区专员 “国大”代表、《大华报》总经理 苏福长途汽车公司董事长。  
許憲民、1936年第三战区、上海淞滬三区専門委員 国民大会代表、大華報社長、蘇福長距離バス会社会長。

解说；就是在这间房间里，林昭的妈妈听到楼梯下索要5分钱子弹费的声音。当时林昭的妹妹彭令范在场，这是她的一段录音。

解说：この部屋にいて、林昭の母親は階段の下から、銃弾費の5分を求める声がするのを聞いた。当時、林昭の妹の彭令範もその場にいた。これは彼女の録音である。

彭令范：就在1968年的五月一号下午，（警察）进来以后，他就问：问我母亲。你是林昭家属吗？妈说是。他说：你女儿被枪毙了，付五分子弹费。当时我母亲听不懂他的话，我在旁边听懂了，我的母亲听不懂，后来他就说：怎么啦，拿五分子弹费！我就从抽屉里给他了五分，他后来还叫我母亲签字，后来他就走了。我母亲那个时候就晕过去了，我们后来知道她是四月二十九号被秘密处决的。

彭令范：1968年5月1日午後、警察が入ってきて、母に質問した。「林昭の家族か?」。「そうです」。「おまえのむすめは銃殺されたから、その銃弾費として5分を支払え」。母は意味がわからなかった。私はその場においてその意味を解したが、母は理解できなかった。それで警察が言った、「どうした？ 銃弾費5分を持ってこい」と。私は引き出しから5分を出して渡した。警察はそのあと母にサインもさせ、それでやっと帰って行った。母はそれから昏倒してしまった。あとで知ったが4月29日に姉は秘密裏に処刑されていた。

彭令范林昭的妹妹  
林昭的妹の彭令範



解说；林昭的妈妈，这个抗日战争中的巾帼英雄，热情帮助共产党革命的民主人士，7年之后也死在上海的外滩街头。有人说是被人打死的，也有人说是暴病而死。

解说：林昭の母親、この抗日戦争の女傑は、共産党に熱心に協力した民主人士だった。この7年後に上

海外灘の街頭で亡くなった。誰かに殴り殺されたとも、突然死したともいう。

### 133

沈泽宜：不知道为什么，我总会想起，山那边的一盏灯在冷雾凄迷的夜晚，在白茫茫的雪地中央，孤独地、美丽的、凛然不可侵犯地亮着。以她的光尽可能远地摒弃着黑暗。

沈沢宜：なぜかわからないが、私はいつも思い出す。山辺の一つの灯火が、冷たい霧の立ちこめた夜、真っ白な雪原の中、寂しく美しく、犯しがたく凛然と灯っており、その光が遙か遠くまでも暗闇を払いのけるのを。

### 134

解说：2004年，一位不愿意面对摄像机镜头，而且身体有病的老人，向我讲述了1968年初春，他在上海提篮桥监狱见到林昭时的情景。

解说：2004年、カメラに映らない条件で、一人の病気がちな老人が、1968年初春に、上海提籃橋監獄で林昭を見たときの情景を私に話してくれた。

匿名者：第三中队仅仅有三个楼面是关人的，四楼、五楼是空在那里。那么当时林昭是从女犯监狱转过来的。为什么呢？就是她大叫大闹，影响周围的环境这些情况，所以把她中转到三中队的五楼。因为五楼没人啊，她是单独的一间，禁闭在那里，有时候晚上她就大喊大叫。

问：她喊些什么呢？

答：喊的就是攻击政府，攻击领袖，就是喊这些口号。因为我是牢狱犯，所以有时上去送饭，就看到过她，她头上戴了一个黑色的人造革做的，都是像棉花做起来的一个头套。头套，那么眼睛也看得出的。

问：她戴一个头套是吧？（开始边问边画）

答：对！对。

问：一直包着头发吗？

答：整个头都包着。

问：噢，整个头都包着，就是光露一个眼睛是吧？

答；是一条缝。

问：噢，就一条缝，你就光能看到她的眼睛？

答：对！一条缝。主要作用就是把她的声音压低了，压低以后那个声音，虽然听得到，但是好像捂住一样，就是很轻了。

问：这个是专门给她做的，还是监狱就有这个东西？

答：这个我就不太了解了。

问：当时她戴的时候是不是头显得很庞大？

答：噢，很膨大的。对。

问：她就光露了两个眼睛？

答：噢，两个眼睛。

问：当时这个地方的鼻子是怎么回事呢？

答：鼻子看不见。



问：鼻子看不见，但这是一个鼻孔是吧，它是不是弄个眼儿了，鼻孔怎么出气呢？

答：我估计没有眼儿。

问：她本身就是靠眼睛这个的缝隙出气？

答：就是这个缝隙出气的。主要这个嘴巴收紧了。

问：就是它这个地方绷得很紧，是吧。当时你怎么知道这个人就是林昭呢？

答：因为开批斗会，广播大会，政府就是做报告嘛，就是作为反改造分子林昭怎么、怎么，政府介绍的。她是上海市监狱中有名的女犯人中的反改造分子。多次介绍的。

问：当时你是怎么看到她的呢？你是从门缝里看到她的？

答：不是门缝里，就是监牢。前面都是铁栅栏，透开的。

问：那她穿的什么衣服呢？

答：穿的衣服年头多了，回忆不起来了。

问：她为什么她自己解不开呢？

答：它这个地方全部都封起来。

问：噢，就是后头全用绳子系得死死的。

答：哎，你没办法打开的。

问：那她这样吃饭怎么办？

答：吃饭时拿掉。

问：谁给她拿掉呢？

答：专门有女的犯人。

问：你看这样是不是有点差不多的那种感觉？

答：差不多！差不多！

匿名：第3中隊は3階にしか拘留してない、4階5階は空っぽだ。林昭は女囚監獄から移ってきた。なぜか？ ひどく騒いだためだ。周囲に影響するから。それで第3中隊の5階に移った。5階は人がいないから、独房だった。そこに監禁された。時には彼女は夜中でも大声を出していた。

胡傑：彼女は何を叫んでいたのですか？

匿名：政府への攻撃、毛沢東への攻撃、そういう言葉を叫んでいた。私は服役中で時々食事を持って行ったので、彼女を見た。彼女は頭に黒い合成革のかぶり物をしていて、綿製みたいなかぶり物だった。頭にすっぽりかぶっており目だけは出ている。

胡傑：かぶり物をしていたのですね？

匿名：そうだ。

胡傑：髪の毛も全部かぶっている？

匿名：頭全部かぶっている。

胡傑：頭全部かぶって目だけが出ている？

匿名：目のところにすき間がある。

胡傑：すき間から目だけが見えた？

匿名：そうだ、すき間があった。もっぱら彼女の声を抑えさせるためだ。声を抑えさせると、聞こえはするが、モゴモゴと小さくなる。

胡傑：これは彼女のために作られたものですか？

匿名：それとも、監獄にはそういうものがある？

匿名：それは私にはわからない。

胡傑：かぶり物なら、頭が大きくなっていた？

匿名：そうだ、大きくなっていた。

胡傑：目だけ出ているのですか？

匿名：そう、両方の目が。

胡傑：鼻はどうなっていたのだろうか？

匿名：鼻は見えなかった。

胡傑：鼻は見えないが鼻の穴は？ 穴をあけてあったのか？ どうやって息をしたのだろうか？

匿名：たぶん穴はなかった。



胡傑：目のところのすき間から息をしていた？

匿名：このすき間から息をしていたんだ。口はきつく絞められていた。

胡傑：口のところはきつく巻かれていたのですか？

当時どうしてその人が林昭とわかったのですか？

匿名：批判大会とか放送があって、当局が発表をした、反改造分子の林昭がどうこうと、当局が紹介した。彼女は上海市の監獄で有名な、女囚のうちの反改造分子で、何回も紹介された。

胡傑：どうやって彼女を見たのですか？ ドアののぞき窓から見たのですか？

匿名：のぞき窓ではない、牢獄なんだ。鉄格子だから、中が見える。

胡傑：どんな服を着てましたか？

匿名：着ていた服は、昔のことで思い出せない。

胡傑：どうして自分では解けないのですか？

匿名：ここで完全に縛られている。

胡傑：後頭部は縄でしっかり縛ってあるわけだ。

匿名：そう、ほどけない。

胡傑：では食事はどうやって？

匿名：食事の時は解いた。

胡傑：誰が解いてやるのですか？

匿名：係の女囚がいるんだ。

胡傑：だいたいこんな感じでしょうか？

匿名：こんな感じだ。

人として、まっとうで、正直で、そして清浄な生きる権利のために戦うこと、これは絶対に非難されるべきことではない。キリスト教徒として、私の生命は神と信仰に属している。自分の道を堅持するため、自分の行く道、神の僕・キリストの政治の道のために、この若者がまず自分の身と心にきわめて大きな代価を払った。これはあなた方のために求め、あなた方のために支払った代価だ。あなた方の人間性、これは人の心なのか！ 私はなぜ人間性を抱こうとするのか？あるいは、なぜあなたがたに対して人間性を抱こうとするのか？それが人の心なのだろうか？けっきょく、父なる神が与えた惻隠と憐憫と良知にすぎないのだろう。あなた方のこの上なく陰湿な恐ろしい部分、この上なく血なまぐさい権力と罪悪の核心に触れている最中、それでも私は、ふとした機会にあなた方にも人間性の輝きがこぼれることを見いだすし、それを無視しているわけではない。だから、あなたがたの魂の深いところに、まだ人間性が滅びずに残っていることを見いだす。そんな時、私はいっそう悲しくなって泣くのだ。

## 135



画外音：林昭在獄中曾用血書这样写道：作为一个人，我为自己的完整、正直而干净的生存权利而斗争，那是永远无可非议的。作为基督徒，我的生命属于我的上帝，我的信仰。为着坚持我的道路，或者说我的路线，上帝仆人的路线，基督政治的路线，这个年轻人首先在自己的身心上付出了惨重的代价，这是为你们索取的，却又是为你们付出的。先生们，人性，这就是人心呐！为什么我要怀抱着，乃至对你们怀抱着一份人性，那么一份人心呢？归根到底，又不过是本着天父所赋予的惻隐、悲悯与良知。在接触你们最最阴暗、最最可怕、最最血腥的权利中枢、罪恶核心的过程中，我仍然察见到，还不完全忽略你们身上偶然有机会显露出的人性的闪光。从而察见到你们的心灵深处，还多少保有未尽泯灭的人性。在那个时候，我更加悲痛地哭了。

解説：林昭は獄中で血書でこう書いている、一個の

## 136

字幕：1968、林昭1968年4月29日在上海被杀害，年仅34岁。林昭说自己这样作，是为了自己迷途重归的基督徒的良心。

字幕：1968、林昭は1968年4月29日、上海で殺害された。享年34才。林昭がこのようにしたのは、自分の寄るべたるキリスト教の良心のためだった。



## 137

解説：通过几年的采访，我终于得到了林昭骨灰的下落，我前往上海。在一所巨大的，安放数千骨灰盒的房间里，我终于见到了林昭的骨灰盒，小木盒上写着：林昭生于1935年歿于1968年。

解説：数年間の取材の結果、私はとうとう林昭のお骨の行き先をつきとめ、上海へと向った。数千もの骨壺を収めた巨大な部屋で、ついに林昭の骨壺を見つけた。木の蓋にこうあった。「林昭 1935年生ま

れ 1968年没)。

## 138

謹以此片献给林昭的英灵

本片仅仅编辑了一部分人对林昭回忆的碎片

我始终没有见到林昭的档案

始终没有拍摄和采访到提篮桥监狱的任何工作人员

甚至林昭的部分同学和亲友也拒绝接受采访或拍摄

我们的历史能不能进入

如何进入并被记忆

謹んでこのフィルムを林昭の英霊に捧げる

本作は一部の人々の林昭に対する回想の断片を編集したにすぎない

林昭の身上書は一度も見られなかった

けっきょく提籃橋監獄のいずれの職員にも撮影や取材はできなかった

さらに林昭の同級生や親友の一部からも取材や撮影を許可されなかった

私たちの歴史は立ち入ることを許さないのか

いかにして歴史に立ち入り、記憶されるのか

撮影：胡杰 胡敏

制作 编辑：胡杰

撮影：胡傑、胡敏

監督・編集：胡傑

2005年6月中国語版・2013年11月日本語版〔完〕

〔(15) ページからのつづき〕

盾であった。コルナイは、計画経済の「実務家としての体験」を総括して、国有経済において不可避免的に発生する全般的不足のメカニズムを鮮やかに分析して見せた。国有経済の企業は、損失が政府から補填される「ソフトな予算制約」のために、常に過剰蓄積の傾向を持つ。特に、生産ノルマの変更に対して容易に超過達成で対応できるように、経営者は様々なコネを尽くして原材料や部品などの生産資材を入手し、過剰に在庫しておく<sup>11</sup>。市場原理の導入が進んだ当時のハンガリーでは、これが過大な投資需要の発注として現れる。他方で「ソフトな予算制約」は、コスト削減や技術革新の誘因をそぐため、生産能力は需要に比べて拡大しない。こうして慢性的な需要超過に見舞われる。その超過需要が生産資材を入手できるときに「在庫しておく傾向」を生み出し、需要超過をますます進行させる——これがコルナイの説いた「不足の経済学」の論理である。コルナイはこう指摘した。——「この問題を今の頭で考え直してみると、既述したハイエク・タイプの議論に辿り着く。すべての知識すべての情報を、単一のセンター（中央）、あるいはセンターとそれを支えるサブ・

センターに集めることは不可能だ。知識は必然的に分権化される。情報を所有するものが自らのために利用することで、情報の効率的な完全利用が実現する。したがって、分権化された情報には、営業の自由と私的所有が付随していなければならない。もちろん、最後の断片まで情報を分権化する必要はないとしても、可能な限り分権化されているのが望ましい。ここで我々は、社会主義中央集権化の標準的な機能のひとつとして、数理計画化が有効に組み込まれないのはどうしてかという問題を越えて、社会主義政治・社会・経済環境の中で、中央計画化が効率的に近代的に機能しないのはどうしてかという一般的な問題に辿り着く。計画化に携わる諸機関の内側で、長期間のインサイダーとして仕事に従事[した体験に照らして]社会主義の信奉者が唱えるような期待は、どのような現代的な技術を使っても、社会主義の計画化では実現できないという確信がより深まった<sup>12</sup>。

コルナイがこのような悲観的展望を書いてから30年、AI（人工知能）は飛躍的に発展して、この問題はあっさりと改善された。そして中国の電腦社会主義はこの利器を巧みに利用して、爆進しつつある。

(2018.4.4)

11 トヨタ自動車の看板方式 just on time や、のちの Quick Response 方式は、この部品在庫を極限まで減らす試みにほかならない。

12 コルナイ・ヤーノシュ『コルナイ・ヤーノシュ自伝 思索する力を得て』盛田常夫訳、日本評論社、2006年、158頁。